

天遊

特別号

栗林澄夫新学長インタビュー

「グローバル化に 対応した大学をめざして」

日本人海外派遣留学生座談会

学生目線の大学広報に

変わる大学図書館

臨場感あふれる双方向授業が可能に



グローバル化に対応した 大学をめざして

栗林澄夫



くりばやし すみお
【略歴】富山大学文理学部卒、大阪
大学大学院文学研究科修士課程修
了、文学修士。研究分野はドイツ
近現代文学。平成16年4月から国
立大学法人大阪教育大学理事・副
学長、平成26年4月1日から学長に
就任。昭和23年生まれ、65歳。



平成26年4月から就任された

栗林澄夫新学長に

大阪教育大学の未来像に

ついて話を聞きました。

（聞き手：赤木登代・広報担当学長補佐）

学生支援を 第一に重視したい

●学長就任に当たって、まずは抱負をお聞
かせください。

栗林 これからの大学運営にとってもっとも重要なのは学生に対する支援です。それは、何よりも教学面でのサポートです。さらに学生生活を送るうえでの環境面の充実も欠かせません。

教学面でのサポートは、この間進展しつつある大学のグローバル化の側面を第一に考えなくてはなりません。それはつまり学生が日本国内だけでなく、国際的な場で活躍できる能力を身につけていくために大学が行う支援のことです。たとえば、グローバル化の中でその必要性が大きく叫ばれている英語の運用能力を伸ばし、それを明確な指標、たとえばTOEFLやTOEICといった外国語検定試験のスコアで証明できるように学習支援を行うことです。

それから、教員養成における免許の厳密化があります。学生一人ひとりが、それぞ



れの内容について自信を持って説明できる力をしっかりと養っていく。そのための多様な支援活動です。

国立大学法人の中でも本学はこれまで学生支援を積極的に進めていると自負しています。それが、どういったところに現れているかといいますと、まずは学費免除が挙げられます。豊かでない家庭環境の中で教職をめざして一生懸命がんばっている学生を支援するために授業料を免除することは極めて大きな意味を持っています。国立大学法人が発足したときには、授業料全体の58%の枠でやっていたのですが、大阪教育大学独自の方策も含めて、すでに8%を超える授業料減免の支援を行っています。

これは、学生の学習環境を整えるという施策の特徴的なことだと思っています。この他に、学生が語学を自主学習するスペースを附属図書館内に設置したり、CALEシステム（自習スペースを整備、拡大することも計画しています）。

さらには、授業実践をサポートするスタジオを設けて、学生の授業風景を自ら点検するという体制も整え、こうした面でも教育内容を充実させていくという努力が行われています。また、教育実習については、附属学校園で盛んに取り組まれています。

現在、本学は全国の基幹的な4教育大学が連携するプロジェクト（通称「HATO」）、そして、京阪奈3教育大学連携プロジェクトを進め、新たな教員養成の可能性を追求しています。現在、その二環として遠隔（双方向）授業システムが実施されていますが、こうした先進的な取り組みを通じて学生の支援策の強化を図っています。



国際化に対応した 英語力養成

●先ほど抱負の中でも重要な目標として掲げられましたが、グローバル人材育成が日本社会における喫緊の課題とされています。その中で特に教員養成大学が取り組むべき使命について、どのようにお考えになりますか。

栗林 「グローバル化」「国際化」というのは今、急に始まったことではないと思います。戦後の経済発展の過程で、日本が先進国の仲間入りをし、諸外国と付き合うことになる中で、元々、国際的な展開というのは必要だったのです。

そのことについて、わたし自身の人生を振り返ってみると、国際化が大きく叫ばれるようになったのは、日本が高度経済成長時代に入った昭和40年代です。わたしはちょうど団塊の世代の末に当たる世代だと思います。その時期は、学生運動が盛んになる時代でもあるのですが、他方では、国際的な事柄に目を向けなければいけない時代でした。

1つはベトナム戦争にどのように対応するかということがありました。作家の開高健が戦時下のベトナムに行き、その現地リポートが日本の若者に衝撃を与えました。その意味で、あの時代、国際化に対応するということは、国際的な事象に目を向けるということとイコールでした。それ以降も、国際化に目を向けるという言葉は消えることがなかったと思います。

ここに来て、ふたたびグローバル化が強調されるようになってきたのは、日本以外の諸外国、中でも発展途上国の人たちが、グローバルな展開をするようになり、競争的な環境が目立つようになってきたということがあります。例えばシンガポール、インド、フィリピンなどは高い語学力をもっており、それが発展を後押ししているといわれています。つまり、発展途上国でも語学力は国の発展に不可欠なのです。

それに比べて、日本の語学力（英語力）は、たとえばTOEFLスコアの国際比較をみても、アジア諸国の中で最下位争いをするほどです。そこで、教育の現場でグローバルな人材を育成することだと、やはり、国際的なコミュニケーションのベースとなる「使える英語力」の養成ではないかと思いま

す。そして、学生が身につけた英語力は、客観的な指標、つまりTOEFLあるいはTOEIC等の国際的に通用するスコアで説明できるようにしておかなければなりません。これは教員養成大学に限らず、すべての高等教育機関で必要になっていると考えています。

同時に、大学の教科専門科目でも外国語による授業というのが必須になってくると思います。大都市圏で教員養成を担っている本学の教科専門の授業でも、日本人の教員、外国人の教員にかかわらず外国語で授業をするという努力は避けて通れないことです。

海外の協定締結校を増やしていきます

●栗林学長は以前、留学生センター長（現・国際センター）として本学の国際交流に尽力されてきました。そこで、昨今、内向きといわれる日本人学生の海外留学についてどのようにお考えですか。

栗林 わたしがセンター長の時は、海外の交流締結校は、10数校程度しかありませんでした。それが現在では40校を超えるまで増えています。しかしながら、これで十分とは全く思っていない。海外では中規模の大学であっても100校以上の協定を結んでいるケースはさらにあります。今後は、協定校もさらに多様な地域から、しかも様々な特色をもった大学を求めて、拡大に努めたいと思っています。

●受け入れ留学生も増やすという方針なのでしょうか。

学生の羽ばたきを 大学は支援します

●本学の学生は高いポテンシャルを有しています。しかし残念ながら、それを十分に開発し切れではないのではないかと考えられます。新学長として、そういった学生にエネルギーを送っていただけますか。

栗林 本学を訪れたお客様から「大阪教育大学の学生さんは実に礼儀正しいですね。質が高い」とよくほめられます。そのことに誇りを感じています。学生一人ひとり頑張っていますし、これからも努力を続けてくれると信じていますが、いかにせん大学側の学生へのサポートが十分にできているとは思っていません。

冒頭の質問でも述べたように、学生支援の第1は、教育内容だと思っています。学生が自ら外に向かって誇ることのできる指標、スコアであるとか、資格取得であるとか、それをきちんと身につけてやりたい。

栗林 本学に受け入れられている留学生は現在、150人を超えるようになりました。国際センターを中心とした教職員の努力が実を結んだものといへん喜んでいきます。一時期は170人を超えたこともありましたが、これでも決して十分だとは思っていません。東京や大阪はメガシティですから、国際化という観点からもっと多くないといけません。

東京学芸大学を例に取ると、かつて500人を超える留学生を受け入れていました。学生規模を単純に比較しますと、本学は東京学芸大学の約4分の3ですから、最低でも200人を超える留学生の受け入れが必要だと思っています。また、送り出す方についても少なくとも100人を超える日本人学生を派遣することをめざしたいと考えています。

他の教員養成大学と 連携事業を推進

●教員養成について、現在、大きなプロジェクトが2つ進んでいます。いずれも他の教員養成大学との連携ですが、どのような成果を期待されていますか。

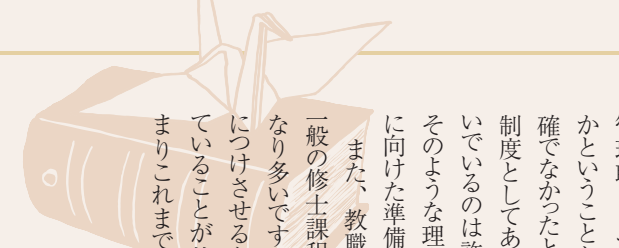
栗林 HATOプロジェクトは、北海道教育大学、愛知教育大学、東京学芸大学と大阪教育大学が連携している事業で、その中には様々な事業が含まれています。それぞれ、国際的な観点を含めて進めており、最終的なねらいとしては、全国の基幹的な4教育大学が連携することによって、新しい私たちの博士課程のあり方を模索しています。京阪奈3教育大学連携プロジェクトは、

そのために、学生自らが学習計画を立て、途上で自ら点検、検証し、改善できる、そういうシステムをつくることが必要であると思っています。

大学としては、シラバスの内容整備、教育内容の点検、結果の確認、そういうことが十分にできるような仕組みをつくっていくことが最低限必要です。この点でも残念ながら、今の本学は十分でないと思っています。

学生が社会に羽ばたいていくためには、もっと早い段階から準備が必要だと思っています。具体的には、実習や研修で附属学校園をもっと活用する、あるいは企業にもっと協力してもらうことが、これまで以上に必要です。また、学生が海外に留学して勉強する取り組みについても支援を講じていき、国際的な視野を身につけられるような仕組みをもっと考えていきたいと思っています。

―新学長が考えるビジョン、本学の未来像がよく理解できました。本日はどうもありがとうございました。



●教職大学院の設置準備も進んでいますね。栗林 教職大学院はすでに他の多くの大学で設置されています。しかし、本学はこれまで教職大学院を設置してきませんでした。その理由は、制度として整備されたものの、教職大学院を修了した学生に対する保障が必ずしも定かではなかったからです。つまり、管理職としてどのような処遇が得られるのかということ、学生の確保が必ずしも明確でなかったという2つの理由です。しかし、制度としてあるものをいつまでも取り組まないでいるのは許されないことだと思っています。そのような理由で、現在、平成27年度設置に向けた準備を進めているところです。

また、教職大学院は、取得単位が45と、一般の修士課程が30単位であるのに比べてかなり多いです。そして、教員の実践力を身につけさせるために10単位の実習が含まれていることが特徴としてあげられます。つまりこれまでの修士課程に比べてより「高





大阪教育大学

日本人海外派遣留学生座談会

写真左より

司会: 長谷川 ユリ (国際センター教授)

出席: 黒田 裕太 宮崎 美聡 片山 元裕 武田 祐季 北一 樹

文部科学省によると、日本人の海外派遣留学生数は2010年に約5万8千人と、ピーク時(2004年)の約8万3千人から3割減少しました。その背景には経済的な理由や就職活動との重複を避けるなど、様々な要因が考えられます。しかし、大学の国際化やグローバル人材の養成が求められている現在、海外留学制度を充実させることがますます重要な課題になっています。

本学は世界の27大学と学生交流協定を結んでおり、毎年交換留学生を派遣し、様々な語学研修や文化研修を実施しています。国際センターは日本人学生の海外留学を全面的に支援しており、出発から帰国まできめ細やかなサポートを行っています。

そこで、本学の留学制度を紹介するために、大学のプログラムで海外留学を経験した在校生5人による座談会を実施しました。

留学に踏み出したきっかけ

司会 「海外に留学したい」と思っている学生は多いかもしれませんが、実行に踏み切る人はまだ少数です。そこで、そういう人たちに留学について知ってもらうために、皆さんが留学したと思ったきっかけや現地での体験、そして留学から得られた成果などについてお話しいただきたいと思っています。

黒田 アメリカに留学したきっかけは、3回生の時に大学のプログラムで4週間のアメリカ語学研修に行ったことです。同じ頃クラスメートがドイツに留学したのも刺激になりました。自分も留学しなかつたら後悔するなと。これまでと違う環境に自分を置いてみたかったのです。

宮崎 小さい頃から海外には興味がありました。実家の隣に外国語大学があった環境で、日常的に外国人を目にしていました。それで、大学生になったら何か外国語を専門に学びたいと思うようになりました。英語を話すことのできる人は多いのですが、それ以外の言語を話せる人は少ないので、ちょっと珍しい存在になりたいという好奇心もありました。そこで、NHKの語学講座で勉強を始めて自分に合っていると感じたのがドイツ語でした。そしてドイツ語を専門に学ぶことのできる大学を探したところ、大阪教育大学に出会ったのです。

司会 宮崎さんは、入学した時から留学を視野に入れていたんですね。では、留学先に韓国を選んだ片山さん、きっかけを教えてください。

片山 大学に入学するまでは海外に関心は特になかったのですが、所属している社会

北 授業を通して「コミュニケーション」に対する考え方が変わりました。人に何かを伝えるのは語学もちろん大切なのですが、大事なものは「何をどうやって伝えるか」ということです。そのことをすごく学んだ気がします。

司会 現地で研究授業で課題だと感じたことはありますか。

文化コースで学んでいる中国人2人、韓国人1人の留学生と知り合い、会話がすごく楽しくて、海外、特にアジアに興味をもつようになりました。

でも、韓国に研修に行ったのは偶然なのです。海外研修の募集に欠員が1人出て、同じ学科の留学生に勧められ応募することになりました。そして、韓国という国に俄然興味がわいてきました。事前学習として、日本と韓国との間のいろいろな社会問題を調べていくうちに、「韓国って面白そうなところだな」と感じるようになりました。

司会 片山さんは、大学で周りの人に触発されたんですね。それぞれに留学の動機が違っていて、とても興味深いですね。では、武田さんはいかがですか。

武田 高校生の時に読んだ本が偶然にもフィンランドの教育に関するものでした。その時は、少し興味をもった程度でしたが、4回生になって卒業研究をする際に、その本のことを思い出し、フィンランドの教育について本格的に勉強を始めたのです。

それには経緯があり、3回生の終わりに、小学校総合認識という学科の主催する3週間程度の北欧教育実習プログラムに参加させてもらいまし



武田 祐季

たけだ ゆき

- ① オーボ・アカデミー (フィンランド) 9ヶ月
- ② 大学院教育学研究科 学校教育専攻 教育学コース2回生

フィンランドの
教育が学びたくて
留学しました

とこれから行く9ヶ月の交換留学の場所がフィンランドの同じ都市で、イメージはできていたので、先生のひと押しで即座に決断できたことだと思います。

司会 北さんも北欧ですが、短期の教育実習プログラムに参加されたんですね。もともと海外に興味があったのですか。

北 他大学の理学部を卒業してから第二部(夜間学部) 小学校教員養成5年課程に編入しました。理学部で学んできたことと北欧での海外教育実習とは実は何の接点もなかったのです。しかし、編入して教育学部に入り、理想の教育モデルとしてよく取り上げられる北欧型教育の実態を知りたくて、応募しました。

理系で留学や仕事を考えると、行先はオーストラリアやアメリカというイメージですが、フィンランドにも有名な精密機械メーカーの「ノキア」という企業があり、技術力が高いものがあります。編入した年に「小学校英語教育」という講義に海外実習プログラムが組み込まれていることを知って、世界の教育現場をみたいと思いました。派遣期間も2週間と短く、挑戦しやすいので参加を希望しました。

留学でどのような成果が?

司会 留学への一歩を踏み出した動機は、みなさんいろいろですね。自分で計画を立てた人もいれば、誰かに背中を押してもらった人もいます。では、留学でどのようなことが身についたのでしょうか。苦労したことや成長を実感したことなどを話していただけますか。



北 子どもたちに返す言葉で苦心しました。実は最初はすごく戸惑いがありました。そこで、コーディネーターとして同行してくださっていた先生と相談し、いろいろと改善はしていったのですが、「もつとこういう言葉掛けができればよかったのに」と思い返すことが多くありました。

司会 確かに外国語で子どもに話しかけることは難しいですね。話している内容がなかなか聞き取れないこともありますから。**片山** わたしもつと語学力を高めないといけないですし、人としての引き出しの多さというのにも必要だということを感じました。

実際にその国の人と直接ふれあうことが大切です



片山 元裕

かたやま もとひろ

- ①ソウル教育大学文化研修(韓国)2週間
- ②教養学科・文化研究専攻・社会文化コース2年生



司会 2人ともコミュニケーションの仕方が変わったということですね。では、武田さんはどうでしたか。

武田 価値観が大きく変化しました。フィンランドには、フィンランド語とスウェーデン語という2つの公用語があります。スウェーデン語の使用率は5%しかなく、わたしはたまたま、スウェーデン語が多く使われているところに滞在していました。つまり、そのフィンランド人は、同じフィンランド人でもスウェーデン語というマイノリティーの言語を話していたのです。

また、小国ならではの言語状況が彼らの生活に現れていました。例えば、外国の本を読みたいと思った時、すべてフィンランド語やスウェーデン語に訳されているわけではないので、しばしば英語で読む必要があります。小国において情報、知識を得ようとするには外国語の勉強は不可欠なのです。このようなことは、実際にフィンランドに行かないと気がつかなかったことだと思います。

司会 日本では外国語の本はすぐに日本語に訳されますからね。それで英語などの原書で読む機会がなくなってしまうとも言えます。

武田 実はフィンランド人の気質は日本人に近いものがあります。それは、時間の過ごし方に現れています。フィンランド人はひとりで過ごすのが好きなのです。他の外国人留学生はわりと集団で過ごすことが普通なのですが、日本人のわたしとしてはひとりの時間がほしいとも思っていました。

司会 韓国に文化研修で行かれた片山さんはいかがですか。

片山 現地に行つて、実際にその国の人と直接ふれあわないとわからないことがたくさんあることを知りました。みなさんご存じのように、韓国と日本の間にはいろいろな問題があります。日本人は韓国人が嫌い、韓国人も日本人が嫌いという報道がなされています。

これまで韓国に対しては特別な感情はなかったのですが、研修参加が決まり、事前に韓国に関する本を読んだり、意識してニュースを聞いたりするうちに、少し不安が募りました。しかし、実際に韓国で研修を始める、向こうの学生チューターはわたしたち日本人にとっても優しくかったです。こういった経験から、韓国に限らず、地球上のどの国でも、たとえ短期間でも、実際に現地の人々と直接ふれあうことが大

宮崎美聡

みやざき みさと

- ①エアランゲン・ニュルンベルク大学(ドイツ)12ヶ月
- ②教養学科・文化研究専攻・欧米言語文化コース5年生



現地では自分で解決する交渉力が求められます

切なのだと思いました。

司会 宮崎さんは、大学でドイツ語を専門に勉強し、ドイツに1年間留学したのですか。

宮崎 ドイツでは、イレギュラーなことがたくさん起きたので、それに対処する方法や主張する力が求められました。

具体的なエピソードをあげます。留学の滞在費として100万円用意したのですが、ドイツ到着後すぐに日本にいる家族から送金してもらったところ、なんとドイツの銀行が間違つて全く違う人の口座に振り込んでしまったのです。銀行側にただちに「移し替えてくれ」と要求したのですが、銀行側は非を認めず、「本人でないといけない」というのです。口座の持ち主がたまたま知っている人だったので、手続きを頼んで、無事に移し替えることができました。

司会 本来は銀行が責任をもつて処理しないといけないことですね。でも、そのおかげで宮崎さんの交渉能力が磨かれたのですか。

宮崎 もう1つ印象に残っている出来事があります。列車が大幅に遅れ、乗り継ぎに間に合わなくなったのです。何のフォローもないので、駅のインフォメーションに行つて、ドイツ語で「どうなっているんですか」

ですか。黒田さんは教員採用試験に合格したのですか。

黒田 はい。教師として、英語を通して世界の文化を生徒に伝えたいと思っています。これからの高校生は海外へ目を向けていかななくてはならないので、その子どもたちの将来への飛躍を後押ししたいと考えています。

司会 宮崎さんはどうですか。就職先が決まったということですが。

宮崎 4月から私立大学に職員として勤務します。大阪教育大学に通じた留学は、オーストラリアのグリフィス大学(語学研修)とドイツのエアランゲン・ニュルンベルク大学(交換留学)の2つを経験しました。その際、国際係の職員の方々のお世話になることが多かったのです。留学先でも何かトラブルに遭ったとき、とても頼りになるのが大学の職員でした。ドイツの大学に行つて驚いたのは、5か国語を話すことのできる職員が、留学生の対応をしていることでした。「格好いいな」という印象でした。

「留学」つて学生が自分で決めることですね。そもそも大学で「何を学ぶか」を自分で決め、また「留学する・しない」も自ら選ぶことができます。そこで、目的意識をもつて専門を選び、留学する道を選んだ人

と激しく抗議しました。話しているうちに、すぐにタクシーを使えば、次の乗り継ぎに間に合いそうだということがわかりました。

そこで、駅員に「タクシーを出してほしい」といったら、「いや、無理だ」と最初は拒否されたのですが、「今起こったことの責任はあなた方側にある」と論理的に主張したら、思いがけず、ドイツ人はきちんと対応してくれました。

司会 すごい交渉力ですね。それにしてもいろいろなプニングがあったのですか。

宮崎 日本だったら「誰か助けて!」と周りに助けを求める場面ですが、ドイツでは誰も助けてくれないので、自分で主張しなければ何も解決しないのです。予想外のことに対応する能力、主張する能力が身についたのは確かです。

司会 日本では当たり前ですが、海外では当たり前ではない。アメリカへ行かれた黒田さんはどう思いますか。

黒田 アメリカは外国人がいることが普通の社会です。従つて、日本人の留学生に対して特別の関心を向けてはくれません。同じアメリカ人に対してとなら変わらないのです。それと、わたしが留学した大学はアジア人が少なく、留学生のほぼ全員がヨーロッパ人でした。そのような状況でどのようにコミュニケーションをとるかで苦心しました。

司会 確かにアメリカでは自己紹介ひとつでも名前を言うくらいですね。「日本から来たんです」と言つても「ああ、そう」とあつさり。

黒田 それが、日本社会と違うところです。最初は苦労したのですが、そうこうするうちにフィンランド人の留学生と仲良く

黒田 裕太

くろだ ゆうた

- ①イーストカロライナ大学(アメリカ)10ヶ月
- ②教養学科・文化研究専攻・欧米言語文化コース5年生



英語科の教師として世界の文化を伝えたい

を応援する大学職員の仕事はとてもやりがいがあると思ったのです。

司会 片山さんは2年生で、卒業までにまだ時間がありますが、韓国での経験を将来どのように生かしたいのですか。

片山 「まだまだ多くのことを自主的に学んでいきたい」という気持ちがあります。特に、その国の言葉を通していろいろな考えにふれ、その国の真実の姿を知りたいと考えています。そのために、韓国への交換留学を希望しています。そして、様々な国を訪問し、暮らしてみたいと思っています。

武田 わたしも黒田さんと同じく中学校の英語教員になる予定です。

留学から得られた成果としては次の2点があると思います。まず一つは、日本人や韓国人は英語習得を目的に留学している人が多いのは確かです。一方、他の国からの留学生は語学の他に目的があつて、英語はあくまで「ツール」です。教師になったら、「英語を通して何を学ぶか」という姿勢が大事だということ伝えていきたいと思っています。

二つめは「何かに一生懸命に取り組む大切さ」です。わたしは留学を通して、フィンランドの国や教育について誰にも負けないほど学んだと自負しています。ぜひ後輩の皆さんにも興味のあることを徹底的に学んではいきたいと思います。

司会 留学経験に限らず、「自分の強み」をもっているからこそ相手に伝えることができるものですね。北さんはいかがでしょう。

北 自分の将来に与えた影響としては、「英語は勉強しなくていいや」という傾向にある理系の生徒や学生に対する働きかけの見通しができたということです。日本は資



源のない国ですから、何をもって将来をつくっていくかという、やはり人材育成が必要であると思います。そのためには理系の学生の英語力を高めることです。その試みとして、中学・高校の理科の授業を英語でやりたいと考えています。

フィンランドは、第3言語が英語です。それで、英語による理科の授業を選択科目として実施していました。その授業を実際に見学し、「こういう授業を日本でもやってみたい」と思うようになりました。英語を媒介として理科的思考を育てる授業を通して、世界に進出して仕事のできる人材育成を促したいのです。

優秀な教師は、生徒の中にある未知なる才能に火を点けるという意味で「インスパイア」するのだと思います。わたしも、た



北一樹

きた かずき

- ①北欧教育実習 (スウェーデン・フィンランド) 2週間
- ②第二部(夜間学部) 小学校教員養成5年課程4年生



英語を通して 理系人材の育成に 取り組みたい

司会 本学の協定校は学術交流を含めると40校にまで増えましたが、その半数以上が中国、韓国、台湾などアジアの国や地域です。後輩の目をアジアに向けさせるために、片山さんに何かメッセージをお願いします。

片山 すぐに「海外留学」とまではいかなくても、とりあえず身近にいる外国人留学生と交流するのはいかがでしょうか。わたしのよう留学生と話をしながら楽しかったから、海外留学を考えてみるというケースもあつていいと思います。

司会 身近なところから世界を知る努力をとというメッセージですね。片山さん自身の経験を踏まえているので説得力があります。宮崎さんはいかがでしょうか。

宮崎 言語習得を目的に留学するのが一般的なケースだと思いますが、教員養成課程の英語専攻の友達に「英語は日本の中でも十分に学習できる。文法も聞き取りも、外国人と話すこともできる。だから、留学をしなくても英語の先生になれる」と言っていました。確かに、英語でもドイツ語でも日本にいながら学ぶことができ、本やイ

だ知識を教えるのではなく、生徒の創造力を引き出す教師になりたいと思っています。

後輩へのメッセージ

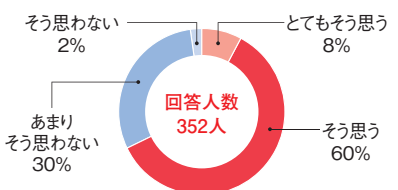


ンターネットを通じて教材も手に入ります。でも、よく考えてみてください。言語は国によって違うのです。現地に行かないとわからないこともたくさんあるのです。つまり、その国の文化や風土を肌で感じ、その国で生きている人々がどのような環境にあるのかは、現地に行かないと感じ取れないものがあります。例えば、天候に関しても、日本では四季がありますが、ドイツでは厳しい冬が特徴的です。その影響で食べ物も違います。とりわけ、興味を引かれたのは歴史教科書における戦争に関する記述の視点が日本とドイツでは全く異なることです。

2 広報全般について

「大阪教育大学の入試情報や基本情報について、十分に広報されていると思いますか」という問いに、7割近くが「とてもそう思う」「そう思う」と回答しました。「そう思う」と回答しました。「そう思う」理由として、受験時にウェブページ等で必要な情報が得られたとの意見が挙げられました。また、「そう思うない」「理」としては、受験時に教養学科や夜間学部の存在を知らず、学外への広報が十分ではないかとの指摘がありました。

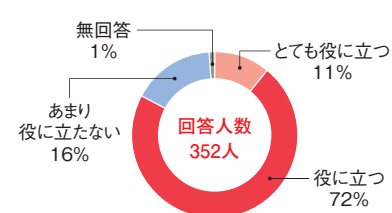
■大阪教育大学の入試情報や基本情報について、十分に広報されていると思いますか？



4 大学ウェブサイトについて

「大学ウェブサイトについてどのように思われましたか」という問いに、8割以上が「とても役に立つ」「役に立つ」と回答しました。改善点としては、アクティブメールとUNI P Aの統合や、アクティブメールやシラバスのリンクページを目的の届く位置においてほしい等、利便性の向上を望む意見が出されました。

■ウェブサイトについてどのように思われましたか？



学生目線の大学広報に

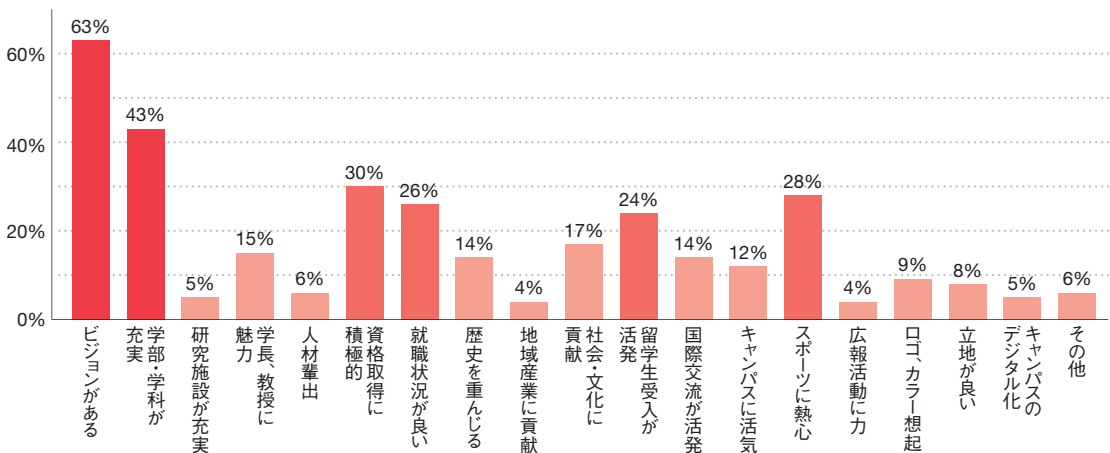
学生対象広報アンケート結果まとまる

本学は、学生目線のわかりやすい情報提供と大学ブランドイメージの向上を目的に、2013年11月に学生アンケートを実施しました。調査対象は、柏原、天王寺両キャンパスの学部生および大学院生(4684人)で、352人(全学生の7.5%)から回答が寄せられました。

1 ”ビジョンがある”のが 本学のアピールポイント

「大阪教育大学のどのような点がアピールポイント(魅力)であると思いますか」(複数回答)という問いに、「教育機関としてのビジョンがある」「学部、学科が充実している」「在学中の資格取得に積極的である」「スポーツ活動に熱心に取り組んでいる」「就職状況が良い」の順に高評価となりました。「ビジョン」「資格取得」「就職状況」の理由としては、教員養成機関として専門性が高く、資格取得や就職のためのサポートが充実していることが挙げられました。「学部、学科」では、専攻・コースが豊富であることや、夜間学部の存在等、多種多様な選択肢が設けられていることが挙げられました。また、「スポーツ活動」では、「部リーグで私立の強豪大学と果敢に競う部活の存在が評価されました。」

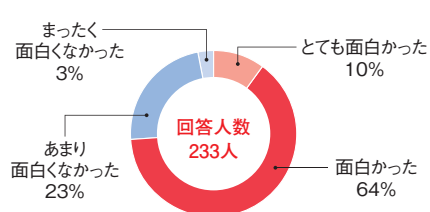
■大阪教育大学のどのような点がアピールポイント(魅力)であると思いますか？(複数選択可) 回答人数:352人



3 広報誌『天遊』について

「広報誌『天遊』についてどのように感じましたか」という問いに、7割以上が「とても面白かった」「面白かった」と回答しました。改善点として、夜間学部や附属学校等の

■「天遊」についてどのように感じましたか？



5 SNSメディアによる 情報配信希望について

「どのようなSNSメディアによる情報配信を希望しますか」(複数回答)という問いには、どの項目も5割に届きませんでした。理由としては、大学公式facebookが浸透していないこと、公式ウェブサイトや大教UNI P A等、既存のサービスの速報性や充実性の向上が望まれていることが挙げられます。

総務企画課として、これらの意見を踏まえ、大学広報活動の充実に生かしていきたいと思っています。

黒田 1年間の海外留学だと、向こうで生活することどしりと構えることができます。その間、成功も失敗も経験できます。いろいろなことに挑戦して自分の可能性を広げることができるのが、長期留学の醍醐味だと思います。また、留学によってその国の同じ世代の人と交わることで、共通性を意識することもできます。

わたしの経験ですが、留学先の授業で戦争中の日系アメリカ人の問題についてプレゼンテーションをしました。その内容は当然、太平洋戦争のことに関するものでした。「理解してもらうのは難しいかな」と思っていました。意外なことに同じジェネレーションとしての共通点を見出しました。外国の同じ世代の人がどのように感じているのか、留学して交流しないと感じ取れないと思います。

日系アメリカ人のテーマだけでなく、ヒロシマ・ナガサキの原爆投下の問題も同じことがいえると思いますが、互いの意見を交換することで、反発もあれば、納得することもあり、アメリカ人の中にもいろいろな考えがあることがわかりました。

司会 すばらしいですね。留学当初は話のきっかけをつかむことにも苦労していたのに、1年足らずの間ではありましたが、最後には日本とアメリカ、同じ世代同士でディスカッションができるまで成長したんですね。これからは、みなさんに続いて、本学の多くの学生が留学にチャレンジし、何かをつかみ取って帰ってきてくれることを願っています。大阪教育大学国際センターは、これからも挑戦する学生を全力でサポートしていきたいと思っています。



変わる大学図書館

ラーニングコモンズについて

大阪教育大学附属図書館

本学附属図書館本館は、柏原キャンパスのほぼ中央、大学会館とサンクンガーデンを挟んで向かいの位置にあり、事務局建物を含めて大学の中で最も人々が集まる「広場」を形成しています。

蔵書数は86万冊余を誇り、平日1200人～1700人、試験期には2000人を超える利用があります。最新の利用者アンケートによれば、読書、予習復習、資料調査、レポート作成、プリントアウトを主な目的として来館しており、ミーティング、DVD視聴が続きます。

電子ジャーナル導入と リポジトリ構築

低層で広々とした空間をもつ附属図書館本館は建築以来20年が経ち、大学は国立大学法人となりました。電子ジャーナルは法人化前後から登場し、現在では7000タイトル超をサービしています。大量のデータを背景にした高価なサービスは、研究のあり方、図書館サービのあり方を根本的に変えました。電子書籍についても、平成26年春には洋書を中心に4000タイトル以上を新たに契約する予定です。一方、平成19年度には大学の知的生産物をインターネットで広く公開することをめざした「大阪教育大学リポジトリ」がスタートし、図書館が大学の発信力向上の一助を担うこととなりました。

充実のパソコン環境

学生にとって、パソコン環境は学習と切り離せない、大切なインフラとなっています。図書館では情報処理センター管理のパソコンを40台、自分の分だけ選んで出力できるオンラインプリントを2台用意しています。(天王寺分館は端末10台・プリンタ1台)さらに、館内貸出用としてノートパソコンを60台(天王寺分館10台)そろえています。平成24年度末にはiPadも10台(天王寺2台)館内貸出を始めました。図書館独自で管理する据置型の端末16台(天王寺分館2台)を含めると、パソコンは本館・分館あわせて150台にもなります。

ラーニングコモンズ 「まなびのひろば」が登場

平成22年12月、科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会による「大学図書館の整備について(審議のまとめ)」―変革する大学にあって求められる大学図書館像―が発表されましたが、図書館では時を同じくし、学内予算要求としてアクティブラーニングスペースと情報環境の充実を目的とした「ICTを活用するための自発的学習環境の整備充実」を掲げました。そして平成23年春、2階の視聴覚スペースはラーニングコモンズ「まなびのひろば」に生まれ変わり、グループ学習室の増設も含め、図書館の用に大きな変革をもたらしました。

自由に空間を構成できる オープンスペース

「まなびのひろば」の中心となるオープンスペースには、可動式の机と椅子が用意されています。さらにホワイトボードとパソコンやプロジェクタ等を接続するためのコンセントもあります。利用者は窓際のハイカウントーで一人・二人で学習するもよし、人数によって机や椅子の配置を変えて学生自らが学習する環境を作りながら、学びあうことの出来る場となっています。これまで図書館ではタブーとされてきた会話を、ここでは学習の二環として認めています。さらに学習効果を高める方策として、平成26年度からは本館オープンスペース内にサポートデスクを設置し、図書館職員や学生スタッフ等によるサポートイベントを少しずつ開催していく予定です。

電子黒板のある グループ学習室

グループ学習室は図書館建設当初から2室用意してありましたが、平成23年に4室に増室、さらに24年度にもう1室増やして計5室用意しています。学校現場には行き渡っているとされる電子黒板はグループ学習室に必須であり、平成24年度に1台、25年度に6台(天王寺分館1台を含む)計7台導入しました。模擬授業や研究発表の練習など、学びあい、批評し合うアクティブラーニング環境として機能していくことが期待されています。

充実した視聴覚資料

教育振興会の支援を得て、DVDだけでも2000タイトルを超える視聴覚資料

「たまごギャラリー」での 展示

を所蔵しています。教育系大学は、他の大学に比べて視聴覚資料の保有数が多い傾向にあります。その中でも本学図書館は特筆すべき量となっています。購入タイトルも毎年利用者からのリクエストに応じて決定しており、教育にかかわる職に就くことの多い学生に、幅広い教養としての視聴覚資料は大いに役立っています。授業等で使用するAVホールの設備も平成25年度、全面的に更新しました。

本館地下は建設当初から展示スペースとして利用されてきましたが、平成22年4月から収蔵スペース、常設展示スペース「大阪教育大学の歴史」、利用者展示スペース「たまごギャラリー」の3つのゾーンに分けま

語学学習用 パソコンブース設置

した。絵画や造形、書道など芸術系コースがある教育大学として、学生が自由に作品を発表できる場を提供することは図書館のうちの使命であり、ほぼ毎月のようにさまざまな展示が行われています。

平成26年春から、2階の一角に語学学習用パソコンブース(CALLブース)4室を開設します。大学の国際化対応の一環として要望があったもので、学生の語学力向上のために用意します。「まなびのひろば」同様に利用されることが期待されています。



◎平成25年度双方向遠隔授業科目

前 期				受講者数 (H26.1.28現在)		
大学名	提供科目名	曜日時限	授業時間帯	京都教育大学	大阪教育大学	奈良教育大学
京都教育大学	健康科学論 (森孝宏教授)	水曜2限 (3.4限)	10:40～12:10	36	6	34
大阪教育大学	学校安全 (藤田大輔教授)	火曜5限 (9.10限)	16:35～18:05	22	85	6
	科学の揺籃から離陸まで (木立英行教授)	木曜1限 (1.2限)	8:50～10:20		11	6
	生涯教育と人間形成 (山田正行教授)	木曜2限 (3.4限)	10:40～12:10	3	35	53
奈良教育大学	考古学と自然科学 (金原正明教授、青木智史准教授)	火曜1限 (1.2限)	8:50～10:20	4	15	34
	持続発展教育と世界遺産 (中澤静男講師)	火曜2限 (3.4限)	10:40～12:10	3	25	46
	問題解決のためのコンピュータを用いたデータ分析入門 (古田壮宏准教授)	火曜3限 (5.6限)	12:55～14:25	2	10	9
	論理サバイバルと文学の中の科学 (中村元彦准教授)	金曜2限 (3.4限)	10:40～12:10	2	33	133
後 期				受講者数 (H26.1.28現在)		
大学名	提供科目名	曜日時限	授業時間帯	京都教育大学	大阪教育大学	奈良教育大学
京都教育大学	地理学 (武田一郎教授)	月曜2限 (3.4限)	10:40～12:10	18	50	27
	心理生理学 (森孝宏教授)	水曜2限 (3.4限)	10:40～12:10	19	48	47
	性倫理と性教育 (関口久志准教授)	木曜1限 (1.2限)	8:50～10:20	102	137	13
	地球科学 (谷口慶祐講師)	木曜1限 (1.2限)	8:50～10:20	20	29	14
大阪教育大学	日本科学技術史概論 (城地茂教授)	月曜3限 (3.4限)	12:55～14:25		20	13
	学校安全 (藤田大輔教授)	火曜5限 (9.10限)	16:35～18:05	23	74	6
	歴史を変えた有機化合物 (任田康夫教授)	水曜2限 (3.4限)	10:40～12:10		21	6
	ドイツ文学を読む (赤木登代教授)	木曜2限 (3.4限)	10:40～12:10		95	48
	知的財産権入門 (片桐昌直教授)	木曜2限 (3.4限)	10:40～12:10	3	31	33
	環境教育論 (石川聡子准教授)	木曜3限 (5.6限)	12:55～14:25		74	32
奈良教育大学	都市防災対策と防災教育 (古田壮宏准教授)	火曜2限 (3.4限)	10:40～12:10	3	43	29
	アジアの中の日本美術史 (山岸公基教授)	水曜2限 (3.4限)	10:40～12:10	1	13	25
	Science Lesson in English (森本弘一教授)	金曜1限 (1.2限)	8:50～10:20	1	3	5
	持続発展教育 (ESD) 概論 (中澤静男講師)	金曜1限 (1.2限)	8:50～10:20		15	43
	ユーラシア美術史 (山岸公基教授)	金曜2限 (3.4限)	10:40～12:10	1	66	14

※曜日時限欄の () 書きは、奈良教育大学における時限設定を示す。

臨場感あふれる
双方向授業が可能に

3 教育大学の資源・特色をふまえ推進

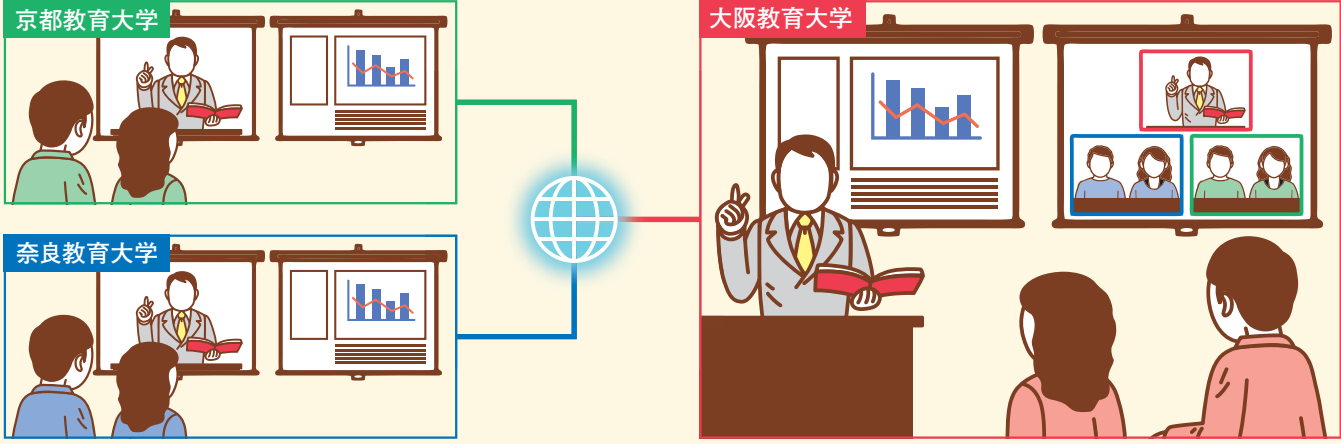


大阪教育大学・京都教育大学・奈良教育大学の3教育大学は、2012年度（平成24年度）後期から大学間における「テレビ会議システムを活用した双方向遠隔授業」を開始しました。それぞれの大学が有している資源・特色をふまえた有機的な連携を促進することで、各大学の教育機能を強めようというものです。

本学では、柏原キャンパス3教室、天王寺キャンパス1教室で双方向遠隔授業用テレビ会議システムを整備しました（今後さらに増やす予定）。これにより、京都教育大学や奈良教育大学と、インターネット回線を通して講義の様子を送信したり、受講生の様子を受信したりすることが可能になりました。

具体的には、教員は目の前に自分の大学の学生を、モニタ上に他の大学の学生を見ながら授業を進めます。つまり、教員が講義をすると、自分の大学および、離れている他の大学の学生も同時に受講することができる仕組みです。他の大学の学生は、モニタに映し出された映像を介して、教員と意思の疎通ができ、学生同士で意見交換やディスカッション等ができるなど、臨場感あふれる双方向授業が可能になりました。在籍する大学にいながらにして各大学の特色ある授業を受講できるというメリットもあります。

これまでの特徴的な授業の取り組みとして、本学が「学校安全」、京都教育大学が「性倫理と性教育」、奈良教育大学が「考古学と自然科学」などの授業を実施しています。2013年度（平成25年度）の実績を参考に掲載します。（別表）





大阪府師範学校の木造校舎の鬼瓦

本学のルーツは1874年(明治7)に東本願寺難波別院内に設置された教員伝習所にまでさかのぼります。翌年には大阪府師範学校と改称され、西南の役などの影響で幾度かの移転も余儀なくされました。そして1901年(明治34)、南河堀町(現在の天王寺キャンパス)に新校舎が竣工されました。この鬼瓦はその校舎の屋根にあったもので、現在は附属図書館に展示され、100年以上の歴史を今に伝えています。